

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 12 日現在

機関番号：28001

研究種目：若手B

研究期間：2011～2012

課題番号：23720073

 研究課題名（和文）リストと彼の一派による「新ヴァイマル協会」  
 —未来音楽、新ドイツ派との関連性

 研究課題名（英文）“Neu-Weimar-Verein” by Liszt and His Circle:  
 Relation to Zukunftsmusik and Neudeutsche Schule

研究代表者

上山 典子 (KAMIYAMA NORIKO)

沖縄県立芸術大学・音楽学部・助教

研究者番号：90318577

研究成果の概要（和文）：

本研究はフランス・リストと彼の弟子や取り巻きたちが中心となって 1854 年に結成した「新ヴァイマル協会」（以下 NWV）の活動実態を明らかにした。そして、この協会と 1859 年に提唱された新ドイツ派との比較検証を行った結果、両者はその歴史的内実において同一視されるべき集団ではないと結論付けるに至った。汎ヨーロッパ的活動を展開した新ドイツ派に対し、NWV はあくまでヴァイマル在住者による地元志向の集まりで、芸術愛好家たちにも開かれたヴァイマル新住民のための社交クラブと化していたからである。

研究成果の概要（英文）：

This study has focused on “Neu-Weimar-Verein” (NWV) founded in 1854, which members included Franz Liszt, his pupils, followers and friends. By clarifying what NWV really was, for example the purpose of its foundation, the regular meetings hold by members, the contents of circular notice and so on, relation to the term “Neudeutsche Schule” which was said to be the alternative name for “Zukunftsmusiker” was investigated. As a result, the study concluded that NWV and “Neudeutsche Schule” were not at all identical, but rather quite different, although many of their members were in both groups. In contrast to “Neudeutsche Schule” which played trans-national, cosmopolitan role during 1850-60s, NWV remained to be social club to the end, open to music-lovers of Weimar local community.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学 芸術史 芸術一般

キーワード：音楽学

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの音楽史研究で、NWV と新ドイツ派とのつながりはしばしば指摘されてきた。「新ドイツ派 Neudeutsche Schule」は 1859 年 6 月、音楽批評家で著述家のフランス・ブレンデル(1811-68)によって提唱された名称

で、ブレンデルは 1850 年代にいわゆる保守派と進歩派の間で繰り広げられた音楽論争のキーワード、「未来音楽 Zukunftsmusik」の代替名称として、当初、一派の代表者をベルリオーズ＝リスト＝ヴァーグナーの「三人組」と提示した。しかし実際にその三人組概

念が定着することはなく、1860年頃には早くも、「新ドイツ派」はリストと彼のヴァイマル時代の弟子や取り巻きたちに対する名称として認知されるようになっていた。

NWVのメンバーにはリストと彼の弟子たちのほか、外地会員としてベルリオーズやヴァーグナーも含まれていたことから、NWVと新ドイツ派は関係者の多くが重複していたとみなされる。またNWVの集会在59年6月を最後に衰退期に入り、以降リストは一度も参加していないという事実から、両集団の直接的つながりを指摘する研究者も少なくなかった。例えばA. ウォーカーは、「[NWV]は作曲家集会で正式に採用された用語、新ドイツ派へと吸収される」(Walker 2001: 770)と指摘し、またヴィンクラーも両集団をほぼ同一と捉えてきた(Winkler 2004: 1598)。他方で、リストのヴァイマル時代に関する今日の研究をリードするデトレフ・アルテンブルクは、NWVは「新ドイツの理論の計画的な遂行、あるいは見習い実習期間だったというよりも、むしろ意見交換や社交として利用されていたもの」だったと指摘し、両者の直接的つながりに否定的な見方を示している(Altenburg 1994: 217)。

しかし実際のところ、NWVについて、そしてNWVと新ドイツ派をどこまで、どう結びつけて捉えるべきなのかについて詳述している研究者はいなかった。というのも、NWVの活動実態はほとんど何もわかっていなかったからである。そこで本研究は、リストと彼の一派が各集団の一員として果たした役割を把握することで、新ヴァイマル協会と新ドイツ派両集団の類似点、相違点、歴史的つながり、関係性を明らかにすることにした。

## 2. 研究の目的

本研究はフランツ・リストと彼の弟子や取り巻きたちが中心となって1854年に結成したNWVの実態を解明したうえで、1850年代に流通した呼び名、「未来音楽」の代替として1859年に提唱された「新ドイツ派」との比較検証を行うことにあった。

1854年末に結成されて以降、1867年の12月3日に解散するまでの13年間、ヴァイマルの町で存続したこのNWVとは一体どのような団体だったのか。音楽家に限らず、他分野の芸術家や文筆家なども多数含まれていたことから、純粋な音楽一派ではないこのNWVは単に私的な文化同好会のようなものに過ぎなかったのか。それとも、「新ヴァイマル」という会の名称は当時ヴァイマルの町を二分していた保守系と進歩系住民の対立を明らかに意識したものであり、やはり対立する党派論争から生み出された「新ドイツ派」に通じる側面を含むのだろうか。

## 3. 研究の方法

初年度は「新ドイツ派」が提唱当時のリスト＝ヴァーグナー＝ベルリオーズの「3人組」の一派ではなく、実際には「リスト一派」と認識されるようになっていった過程を明確にした。また二年目はNWVの活動実体の調査に基づいて、「新ドイツ派」との関係性を考察した。この活動実体の調査にあたっては、初年度および最終年度とも、「新ヴァイマル協会 Goethe- und Schiller-Archive」が残した一次史料(手書き文書、一部は未整理)を唯一保存するヴァイマルの「ゲーテ&シラー・アルヒーフ」(以下GSA)にて資料調査を行った。今回閲覧することが出来たのは、NWV設立当初の規約書、発足の理念書、メンバーたちによる自筆サイン書、その後定期的に発行されていた会報誌、メンバー間で交わされていた書簡などの貴重資料である。

なお本研究に関連して、GSAにて参照した資料は以下の通りである。

資料整理番号	資料枚数	年	内容
GSA 59/224	9	1855 -65	NWV 会員たちの自筆記名簿
GSA 59/226	86	1863	NWV10周年記念祭に関する文書(プログラム、招待状、招待者一覧等)
GSA 59/228-1	11	1854 -64	NWVの業務文書(主にメンバー表)
GSA 59/228-2	6	1862	NWVの業務文書(主に所蔵目録)
GSA 59/230-1	74	1854 -56	NWVメンバー内の回覧版(Nos. 1-34)
GSA 59/230-2	23	1857	NWVメンバー内の回覧版(Nos. 35-43)
GSA 59/230-3	18	1857 -59	NWVメンバー内の回覧版(Nos. 44-66)
GSA 59/230-4	18	1859 -62	NWVメンバー内の回覧版(Nos. 67-78)
GSA 59/231	47	1862 -67	NWVメンバー内の回覧版(Nos. 79-115)

#### 4. 研究成果

先行研究ではNWVと新ドイツ派との直接的つながりが度々指摘されてきたが、今回の考察の結果、少なくとも以下3つの観点において、両者はその歴史的実態において同一視されるべき集団ではないと結論付けるに至った。

まず、両集団はそれぞれが見据える方向性や視点において極めて対照的な性質である。汎ヨーロッパ的一派として提唱された「新ドイツ派」は、代表者や概念が変化して以降も実際にコスモポリタンな活動を展開した一派だったのに対し、NWVはあくまでヴァイマル在住者による地元志向の集まりだった。また当初は「共通の奮闘の集権化」というモットーが掲げられたものの、協会の運営は明白な理念や目的に基づくものとはほど遠いものだった。1857年、リストの誕生会開催の事前通知がNWVではなく、「芸術家と芸術愛好家たちによる団体」として町の名士たちにも回覧されたことは極めて象徴的である。NWVは設立当初のリストと彼の仲間たちによる限定的な一団ではなく、芸術愛好家たちにも開かれたヴァイマル新住民のための社交クラブに変容していったのである。50年代後半、NWVの活動の柱はリストの誕生会、設立記念を祝うジルベスターの集い、そしてヴァイマルを訪問した芸術家たちをもてなす祝宴会だった。リストが催した音楽の祭典、「ベルリオーズ週間」にNWVが団体としてかかわったのは演奏会そのものではなく、その来賓をもてなす夜の宴会である。

そして、1859年6月3日の「新ドイツ派」提唱と同月27日以降のNWVの集会開催頻度の著しい減退の時期的な一致については、完全な偶然と説明されうる。NWVの集会の凍結は「新ドイツ派」の提唱ではなく、その月の23日に同地の文化振興に大きな役割を果たしてきた大公妃マリア・パヴロヴナが亡くなり、その後3ヶ月間はあらゆる行事が自粛されたことと関係がある。埋葬の儀の当日に召集された特別集会を最後に、空白の3ヶ月がついには定期集会を消滅させる契機につながったのである。

さらにはメンバーの一致という点についても議論の余地がある。NWV設立時のメンバーと「新ドイツ派」の関係者は、確かに多くが重複している。しかしNWVの発起人で、その運営を事実上仕切っていた長老の詩人アウグスト・ハインリヒ・ホフマンが協会決議への絶対服従を求めた瞬間、若手音楽家たちは次々と離脱していった。結成からわずか2ヶ月後、リストの作曲の助手を務めていたヨアヒム・ラフが退会、それにポールらが続いたことに象徴されるように、NWVの会員の出入りは驚くほど目まぐるしかった。そして50年代後半にはリスト周辺の音楽関係者の多

くが脱退、あるいは集会にほとんど顔を出さない状況になっていた。リスト自身も同じだった。リストの書簡でNWVに関する言及が見られるのは設立から数年内に限られ、また集会参加の頻度などからも、少なくとも56年以降、リストのNWVに対する関心は相当薄れていたものと推測される。また、ベルリオーズとヴァーグナーの名を含む外地会員（後に名誉会員）といった名称は存在したが、実体活動の見地からそれは有名無実の飾りに過ぎず、彼らが協会内で果たした役割は何も知られていない。

このような状況下、リストがヴァイマルを去った1861年8月以降もNWVが6年余りの間存続したのは、すでにだいぶ前から美術や劇場関係者たちが主体の団体に变化していたからである。1867年12月、15名で構成されたNWV解散時の会員表にはリスト時代とは全く異なる名前が連なっていた。設立当初からのメンバーはヴァイオリニストのカール・シュトゥールただ一人だった。リスト一派として汎ヨーロッパ的活動を展開させていった「新ドイツ派」とは異なり、NWVはあくまで「芸術家と芸術愛好家たちによる団体」として、ヴァイマルの社交界に存在した一時的な文化現象のようなものだったのである。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

(1) 上山典子「ブレンデルの『新ドイツ派』提唱と概念の変遷——三人組からリスト一派への道のり」、『音楽学』、査読有、第59巻1号、2013年10月発行予定、14頁分

(2) 上山典子「文化現象としての『新ヴァイマル協会』(1854-67年)——芸術家と芸術愛好家たちによる団体」、『沖縄県立芸術大学紀要』第21号、査読無、2013年、1-18頁

(3) 上山典子「進歩派におけるリストの交響詩評価」、『沖縄県立芸術大学紀要』第20号、査読無、2012年、89-104頁

(4) 上山典子「オーケストラツィクルスとしてのリストの12の交響詩——詩的素材に基づく配列と調的関連性」、『音楽学』、査読有、第57巻1号、2011年、1-14頁

[学会発表] (計 1 件)

(1) 司会・企画：野本由起夫、パネリスト：福田弥、上山典子「『新ドイツ派』と音楽論

争」、広瀬大介、〈標題音楽の真実と絶対音楽のウソからフランチ・リスト生誕 200 周年記念シンポジウム〉、日本音楽学会東日本支部第 5 回定例研究会（「日独交流 150 周年」認定事業）於 玉川大学、2011 年 10 月 2 日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

上山 典子 (KAMIYAMA NORIKO)  
沖縄県立芸術大学・音楽学部・助教  
研究者番号：90318577

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：